様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６１１０１０

研究課題名（和文）アジアにおける内発的地域振興デザインのあり方に関する調査・研究

研究課題名（英文）Endogenous Regional Development Design that expected in Asian Countries

研究代表者
宮崎　清（Miyazaki, Kiyoshi）

千葉大学・工学（系）研究科（研究院）・名誉教授

研究者番号：９０００９２６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　4,100,000円、（間接経費）　1,230,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、これまでアジアの各地において策定・実践されてきたさまざまな地域振興デザイン計画のなかでも、とくに、地域の生活者が担い手となり、生活の質的豊かさを追求した内発的地域振興の視座からなされてきた実例を取り上げ、その理念の構築と実践に関する諸相を、実地調査を通して明確化するとともに、その知見を生かしたこれからの地域振興デザインのあり方を考究・提示することを目的としたものである。

研究成果の概要（英文）：　In this study the authors discuss regional development design in Asian countries, especially try to understand characteristics of practices and concepts about endogenous regional development design. Endogenous regional development design is pursued by many Asian countries, because of environmental problems, decreasing regional identities, and so on. under modernization, urbanization, and globalization. The authors propose how to be done by designers and researchers in Asian countries to deal with the problems from standpoint of regional development.

研究分野：時限

科研費の分科・細目：デザイン学

キーワード：デザイン　地域資源　内発的発展　生活文化　国際研究者交流　アジア　サスティナブル　伝統的工芸

１．研究開始当初の背景

デザインとは、人間の生活を、「あるべき姿」に向けて創造的に改変させる実践的活動である。地域振興デザインにおいては、その「あるべき姿」の形成は、自然・人文・社会などのあらゆる側面において、本来地域が有してきた「顔」とでもいうべき固有の特性を顕在化し活用しなければ、実現し得ない。しかしながら、これまでなされてきた多くの「地域開発」においては、しばしば上述の地域特性の十分な精査がなされず、いわば「外」からの論理で実施された場合が少なくない。その弊害は、多くの地域社会において、社会の不均衡やさまざまな環境問題、地域アイデンティティの希薄化などが問題と化していることからも明らかである。

維持可能な社会の構築が求められる今日、地域振興デザインにおいては、これまでの経済効率優先の方法論に代わり、地域特性を活かし、地域の魅力づくりや地域アイデンティティの確立を目指した内発的地域振興への移行が求められている。

内発的地域振興は、スウェーデンのダグ・ハマーショルド財団が、1975 年の国連経済特別総会の報告書のなかで、「もうひとつの発展」という新たな発展の概念を提起した際、その属性のひとつとして重要性が初めて指摘された。従来の近代化・工業化では果せなかった社会建設を目指し、当該の地域振興にかかわる潜在的資質の内発的活性化を図ることを基盤とすることが謳われた。すなわち、社会連帯の形成と維持機構の確立がその基底に位置づけられ、より健全な社会づくりが目指された。その後、非西欧文化圏である日本をはじめとしたアジア諸国においても、当該の国・地域の歴史・風土に適合しつつ、いわば、固有の内発的地域振興が胎動し展開されてきた。しかしながら、多くの地域振興デザイン計画の事例のなかで主流をなしたとはいい難く、また、それゆえに、これまで、アジア各地で計画・実践されてきた内発的地域振興に関する理念の構築と実践に関する実地調査、ならびに、その実質的展開のための具体的・実践的な研究は十分になされてきたとはいい難い。今こそ、アジア各地において内発的地域振興の視座からなされてきた地域振興デザイン計画の実態を取り上げ、その理念の構築と実践に関する諸相を、詳細な実地調査を通して明確化し、その知見を生かしたこれからの地域振興デザインのあり方を考究・提示していくことが重要である。

２．研究の目的

本研究は、これまでアジアの各地において策定・実践されてきたさまざまな地域振興デザイン計画のなかでも、とくに、地域の生活者が担い手となり、生活の質的豊かさを追求した内発的地域振興の視座からなされてきた実例を取り上げ、その理念の構築と実践に関する諸相を、実地調査を通して明確化するとともに、その知見を生かしたこれからの地域振興デザインの在り方を考究・提示することを目的としたものである。

３．研究の方法

本研究では、研究代表者らとすでに密接な協力関係が築かれている日本ならびにアジアの各国・各地域を対象として、各国・各地域の公的機関・民間団体・生活者、ならびに、内発的地域振興の研究者・実践者らとの協働に基づき内発的地域振興デザインの実相に関するデータの集積を図った。

なお、日本における事例研究は、福島県三島町、新潟県山北地域、京都府伊根町、アジアにおける事例研究は、台湾における大甲地域で行った。

４．研究成果

本研究において把握した内発的地域振興に関する事例研究の成果の一部と内発的地域振興デザインの特質を記載する。

(1)実地調査に基づく日本における内発的地域振興デザインの実相に関するデータの集積

日本における内発的地域振興の先進的事例を取り上げ、実地参与観察に基づき、内発的地域振興デザインの実践に関する諸要素を抽出した。調査対象地域ならびに各地域において収集した内発的地域振興デザインの概要は以下の通りである。

①福島県三島町における実地調査結果

福島県三島町は、福島県の西部に位置する山村である。過疎・高齢化という社会問題を抱え、今日の日本における典型的な山村のひとつであるといえる。また、冬には２メートル以上もの雪が降り積もる豪雪地帯でもあり、古くから、各家々で冬の農閑期の家内作業として、天然素材を活用したさまざまな生活用具づくりが行われてきた。このような生活者自らの手による生活用具づくりの文化が、当該地域のアイデンティティの礎であるとの認識が町民の間に共有され、町をあげて「生活工芸運動」が始められたのが 1983(昭和 58)年のことである。以来、この運動が、三島町における地域づくり活動の中核に位置づけられ、今日まで確実に継承され発展してきた。「生活工芸運動」は、地域に産する天然資源を活用し、当該地域の生活者らが主人公となって行われてきたことから、まさに内発的地域振興の代表的な事例のひとつであるといえよう。近年では、「生活工芸運動」の基底にある自然との共生生活の理念が隣接する奥会津地域の町村にまで波及し、それらの地域においても生活工芸の価値が見直されつつある。また、都市地域に居住する人びとが三島町における生活工芸運動の価値を見直し、その成果品が都市居住者のなかでも広く使われるようにもなっている。とりわ

け高齢男女によって担われている生活工芸運動が人びとの間で生き甲斐にまで成長していることは、今後の内発的地域振興デザインの指針導出に当たって示唆する点が多い。

なお、当該地域の生活用具づくりは、2003(平成 15)年に、経済産業省指定の伝統的工芸品に「奥会津編み組細工」として指定され、国からの支援が得られる状況に至っており、今後の展開が期待されている。

②新潟県山北地域における実地調査結果

新潟県村上市山北地域は、新潟県の最北部、山形県との県境に位置している。日本海から運ばれてくる冷気は、冬季には大量の雪をこの地にもたらす。

当該地域における内発的地域振興が展開され始めたのが、1989(平成元)年の「山北町観光開発基本計画 ～魅力ある集落づくり」の制定・実践であった。以来、48 の集落のひとつひとつがまさに光り輝くことを目指した各種活動が展開されてきた。

例えば、山熊田集落は、山北町のもっとも山奥に位置する集落である。科の木(オオバボダイジュ)の樹皮でつくる「しな布」は、山里で生活するためには欠かせない生活必需品であり、冬季間や農閑期の主婦の大切な仕事の一つとして織り継がれてきた。しかし、化学製品の出現等を要因として、使い手も織り手も減少し、高齢者の手内職としてわずかに残されているだけになっていた。

こうした伝統を集落の「光」として絶やさず継承していこうと、人びとは、織りの技術講習などを積極的に行った。そのような活動のなかから、「自分達も地域に関わりのある仕事を自分達の手でやってみたい」という女性たちの声が挙げられるようになった。「しな布を活用した地域づくり」の取り組みに山熊田の人びとが共感し、多くの人びとの援助を受け、2000(平成 12)年、しな布の製造・販売をはじめ、また「アク笹巻」「栃餅」「赤かぶ漬け」といった特産物の加工・販売も手掛ける「さんぽく生業の里企業組合」が設立された。

なお、このものづくりの文化は、2005(平成 17)年に、経済産業省指定の伝統的工芸品に「羽越しな布」として指定され、国からの支援が得られる状況に至っており、今後の展開が期待されている。本調査・研究では、科布づくりの材料採取から使用・廃棄、それらの活動を主体的に実施するつくり手や支える行政のあり方に至るまでの内発的地域振興デザインを支える諸側面を把握した。

③京都府伊根町における実地調査結果

京都府伊根市は、古くから漁猟を生業とする人びとが伊根湾を中心に構築された集落である。人びとは、伊根湾に面した舟のガレージを兼ねた家屋を建てその数は250軒にものぼる。その構成は、町屋と近似しており、湾に対して間口が狭く、奥行が深い短冊型の敷地に軒を接して建つ町屋では、表から奥まで土間を通し、その一方に部屋をほぼ一列に並べ、敷地のほぼ中央に坪庭を配置することによって、通気性と採光を向上させてきたのである。坪庭には石や植物などを配し、通りに面した公的空間と奥の私的空間を区分してきた。本研究においては、このような町屋の構造にみられる自然を生かした生活文化の諸要素を収集することができた。

また、当該地域の独特の家屋を利活用に基づき保存しようとしているのが、「伊根浦舟屋群等保存会」である。舟屋の維持・継承に向けた諸施策、ボランティアによる各種ガイド活動はもとより、地域の内発的発展を支える柱としての役割を担っている。それらの活動においては、2005(平成 17)年に「重要伝統的建造物群保存地区」に指定され、その活動はもとより、地域の環境整備として「町並み美化クリーンキャンペーン」や「花いっぱい運動」、また、「会報の発行」やその他のイベントなどを展開している。また、その活動を行政の立場から伊根町役場が支えている。

(2)実地調査に基づく、アジアにおける内発的地域振興デザインの実相に関するデータの集積

①台中市大甲地域におけるにおける実地調査結果

大甲藺工芸は、当該地域の特産である大甲藺を利活用してつくられる生活工芸である。古く、清時代に、台湾における少数民族のひとつであるタオカス族の二人の女性が、大安渓下流付近に自生する大甲藺を発見し、蓆などの生活用具の材として用いたのが始まりとされる。人口の多くが中国大陸からの移民もしくはその子孫で構成される台湾において、数少ない独自の工芸の一つである。日本領有時代の台湾においては、産業化が展開され、台湾 5 大輸出産業の第 3 位に位置づけられるほどに大いに発展した。しかしながら、今日、大甲藺工芸は消失の危機を迎えており、その対策が急務となっている。

本調査においては、「社区総体営造」の手がかりとなるよう、これまでなされてこなかった大甲藺工芸の生活文化としての特徴や産業の変遷をまとめるとともに、それに関与した人びとの活動を内発的発展の観点から明らかにした。

その結果、大甲藺工芸は，当該地域の人びとの生活のなかで、より良質な材料をつくり出すための工夫を全体活用に基づきつつ徹底的になされ、かつ、生活との密接な関連のなかで創生され発展してきたものであることなどを見出した。

②国立台湾工芸研究発展センターにおける実地調査結果

同センターが「台湾省手工業研究所」として台湾中部の草屯市に設立されたのは 1973 年のことであった。以来、「国立台湾工芸研

究所」「国立台湾工芸研究発展センター」と名称を変えつつも、台湾における伝統的工芸品の支援機関としてきわめて重要な役割を果たしてきた。特に、1994 年に始められた台湾全土を挙げてのおける地域づくり活動である「社区総体営造」の推進に関しては、国の文化建設委員会(今日の文化庁)の受け皿として台湾の各地域における内発的発展を支えてきた。

(3)文献調査に基づく、日本における伝統的工芸品の指定の申出書にみられる内発的地域振興デザインの実相に関するデータの集積

日本における伝統的工芸品産業の振興を国の行政機関として担ってきたが財団法人伝統的工芸品産業振興協会である。今日までに、218 品目もの伝統的工芸品が指定されるに至っている。産業振興としての立場ではあるが、主として、生産者から提出された振興策を政策的に支援するというスタイルと採っており、内発的地域振興デザインのひとつの姿といってよい。本研究においては、それらの申請から認定、支援事業に関する情報を蓄積するとともに、伝統的工芸品の特質を把握した。その結果は以下の通りである。

・地球にやさしい伝統的工芸品産業
・伝統的工芸品産業のキーワード：地域･自然･歴史
・生活文化の創生という役割を担う伝統的工芸品産業
・地域の生活文化のグローバル化

このように、まさに、地域の伝統的ものづくりの再確認・再認識に基づく地域振興は、内発的地域振興デザインの代表的な事例であり、今後にあっても広く支援していく必要がある。

(4)まとめ

本研究の研究代表者は、ADCS (Asia Design Culture Society)を主宰し、当該研究テーマである内発的振興デザインに関する情報共有ならびに今後の展開に関する検討会の開催に基づき、そのデータを蓄積することを各界の研究者・実践者らに呼びかけている。その成果は、2011(平成 23)年度にあっては 96 件、2012(平成 24)年度にあっては 117 件、2013(平成 25)年度にあっては 161 件の実践報告として、Bulletin of Asian Design Culture Society No.7～9 に収集がなされている。また、それぞれ、千葉県千葉市、台湾高雄市、京都府伊根町において日本ならびにアジア各国・各地域の内発的地域振興に関する実践者・研究者らとの情報共有を行うとともに、これからのあり方を考える検討会を開始し、述べ 500 名余が参加した。

なお、先述したように、「内発的発展」という概念が示されたのは、1975 年の国連経済特別総会の報告書において示された「もうひとつの発展(Another Development)」という概念の属性のひとつであった。

今日、アジアの各国・各地域においては、急速に展開する近代化のなかでさまざまな社会問題が生起しており、そうした意味においては、改めて今日の状況に鑑みつつ、内発的地域振興の導入を図る必要がある。

(a)当該地域の生活者らの必要に基づくこと
(b)当該地域の歴史を踏まえ、物質的・非物質的側面において地域資源の再発見・再認識に基づくこと。
(c)自律的・自立的であること
(d)エコロジー的に健全であること
(e)経済社会構造の変化に基づく

世界的にも、経済発展の限界が叫ばれるなか、今日、再度、「もうひとつの発展(Another Development)」としての「内発的発展(Endogenous Development)」の意味とあり方を問い直し、これからの生活創造をなすべきであろう。なぜなら、生活を創造するのは、まさに、地域の生活者に他ならないのだから。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 11 件）

① Jui-Yang KAO, Shyh-Huei HWANG, Shu-Cheng TSENG, Kiyoshi MIYAZAKI, RECONSTRUCTING THE PUBLIC DOMAIN OF RURAL COMMUNITIES IN TAIWAN -A Case Study of Tu-Guo Village, Bulletin of Japanese Society for the Science of Design, 査読有, Vol.60, No.3, pp.63-70 (2013)
Doi: 10.11247/jssdj.60.3_63

②李艶、宮崎清、中国景徳鎮における製磁の雇用体制 ―現在にもみられる中国景徳鎮地域における伝統的製磁業の雇用文化 、デザイン学研究、査読有、第 60 巻、第 1 号、pp.27-32 （2013）
Doi: 10.11247/jssdj.60.1_27

③張英裕、宮崎清、台湾における伝統建築の装飾に関する研究 ―北港鎮朝天宮の屋根装飾、デザイン学研究、査読有、第 60 巻、第 1 号、pp.1-10 (2013)
Doi: 10.11247/jssdj.60.1_1

④劉俊哲、植田憲、宮崎清、伝統的「秦淮灯彩」の社会的・文化的役割 ―視覚的資料・文学作品に登場する「秦淮灯彩」に関する考察に基づいて、デザイン学研究、査読有、第 59 巻、第 3 号、pp.103-112 (2012)
Doi: 10.11247/jssdj.59.3_103

⑤劉俊哲、植田憲、宮崎清、中国・南京における伝統的灯籠「秦淮灯彩」の成立と発展 ―文献資料の精査を中心として、デザイン学研究、査読有、第 59 巻、第 3 号、pp.93-102 (2012)
Doi: 10.11247/jssdj.59.3_93

⑥朱寧嘉、植田憲、宮崎清、中国・嘉興水郷地域にみられる「連家船」における生活文化 ―中国における「少物」デザインに関する研究(2)、デザイン学研究、査読有、第

59 巻、第 1 号、pp.41-50 (2012)
Doi: 10.11247/jssdj.59.1_39

⑦朱寧嘉、植田憲、宮崎清、中国技術古書『天工開物』にみられるものづくりの指針 ―中国における「少物」デザインに関する研究(1)、デザイン学研究、査読有、第 58 巻、第 6 号、pp.69-78 (2012)
Doi: 10.11247/jssdj.58.6_69

⑧瞿莎蔚、宮崎清、鈴木直人、近代中国の「印刷広告」にみられるコミュニケーション文化 ―中国広告のコミュニケーション文化に関する研究(2)、デザイン学研究、査読有、第 58 巻、第 5 号、pp.97-104 (2012)
Doi: 10.11247/jssdj.58.5_97

⑨劉夢非、宮崎清、近年の中国における工業設計振興の様態 ―2010 年に展開された中国における工業設計活動を中心として、デザイン学研究、査読有、第 58 巻、第 5 号、pp.87-96 (2011)
Doi: 10.11247/jssdj.58.5_87

⑩瞿莎蔚、宮崎清、鈴木直人、中国古代絵画にみられる広告の様態 ―中国広告のコミュニケーション文化に関する研究(1)、デザイン学研究、査読有、第 58 巻、第 4 号、pp.67-76 (2011)
http://ci.nii.ac.jp/naid/110008798990

⑪劉夢非、宮崎清、中国における工業設計振興の始動 ―1970 年代後半の「中国工業美術協会」設立の経緯を中心として、デザイン学研究、査読有、第 58 巻、第 3 号、pp.79-88 (2011)
http://ci.nii.ac.jp/naid/110008798980

〔学会発表〕（計 2 件）

①宮崎清、澤田惠子、内発的地域活性化計画の特質 ―過疎地域・福島県三島町における生活工芸運動、ADCS (Bulletin of Asian Design Culture Society)、査読有、No.8、2014 年 3 月 1 日、京都府伊根町

②宮崎清、ささやかな思いのパッチワーク、ADCS (Bulletin of Asian Design Culture Society)、査読無、No.7、2013 年 3 月 1 日、台湾高雄市

６．研究組織

(1)研究代表者
宮崎　清（MIYAZAKI Kiyoshi）
千葉大学・大学院工学研究科・名誉教授
研究者番号：９０００９２６７

(2)研究分担者
鈴木　直人（SUZUKI Naoto）
千葉大学・大学院工学研究科・教授
研究者番号：９０５６８２３９

(3)連携研究者
植田　憲（UEDA Akira）
千葉大学・大学院工学研究科・教授
研究者番号：４０３４４９６５